

令和三年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和四年三月

一般社団法人 高山市文化協会

序

一般社団法人 高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、郷土に係わりのある文学作品を収集・調査して、作者の功績などを「高山市近代文学館調査・研究報告書」にまとめ、市民の皆様にご紹介しています。

今年度は「近世から近代へ」と題し、近世から近代までの郷土の文学がどのように展開されていたのかをテーマに、天領の時代に活躍した著名人が遺した筆跡や近代に続く文学者の作品を調査しました。

この企画事業は引き続いて調査を実施し、その結果を定期的に報告する予定です。なお、この度の調査研究報告書を作成するにあたり、資料をお借りした方々、また調査などにご協力いただいた皆様に対し、心から厚く御礼申し上げます。

令和四年三月

一般社団法人 高山市文化協会

目次

第三十三回近代文学館企画展「近世から近代へ」 近世（天領時代）	1
------------------------------------	---

第一章 高山陣屋代官・郡代

一、第十二代郡代 大原彦四郎	2
二、第十三代郡代 大原亀五郎	3
三、第二十一代郡代 小野高福	6
四、第二十四代郡代 高柳元曜	5

第二章 陣屋役人

五、飯山延昌	6
六、井田至芳	7
九、館柳灣	8

第三章 文学者（近世）

五、森江鷗	9
七、津野滄州	10
十、上木清成	11
十一、桐山力所	12
十二、南裔楚雄	13
十三、野口午有	14
十四、野口兎来	15
十五、平田長等	16
十六、加藤歩簫・雲橋社	17
十七、赤田臥牛・静修館	19
十八、田中大秀	21
十九、大森旭亭	25
二十、三島正英	26
二十一、二木長嘯	27

二十二、蒲八十村・白雲居相常	28
二十三、加藤素毛	34
二十四、廣瀬重武	35

近代（明治・大正・昭和前期）

第四章 高山県知事

二十五、梅村速水	36
二十六、吉田文助	38
二十七、宮原大輔	39

第五章 文学者（近代）

二十八、永田吉右衛門・花蔭会	41
二十九、河東碧梧桐	43
三十、塩谷鵜平	45
三十一、瀧井孝作	47
三十二、柚原畦菫	49
三十三、岩谷山梔子	50
三十四、小鳥良々	51
三十五、江黒房吉	52
三十六、江黒亮一	53
三十七、五升庵蝶夢	54
三十八、水音社	55
第六章 近世・近代・現代の文芸組織	
三十九、俳句結社	56
四十、短歌結社	58
四十一、詩の結社・文芸誌	59
四十二、小説の結社・文芸誌	60
四十三、その他、評論・随想・他誌	60

第三十三回 近代文学館企画展

「近世から近代へ」

令和四年三月五日(土)～六日(日) 於 高山市図書館「煥章館」

近世（天領時代）

第一章 高山陣屋代官・郡代

山に閉ざされた飛騨では、江戸から派遣される代官・郡代からもたらされる知識は、貴重なものであった。

一、第十二代郡代 大原 彦四郎「おおはら・ひこしろう」

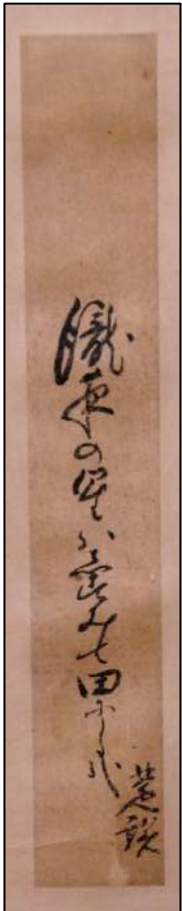
生年不詳、安永八年（一七七九）九月二十二日

十二代飛騨代官（後に郡代）。名は紹正・継正。号は清流亭楚諾。

明和三年（一七六〇）五月十日に江戸勘定奉行所の御勘定組改役から着任。飛州御用木元伐休止や年貢金納の繰り上げ、検地、永久石代定値段の強要などによって大原騒動を惹起。獄門、遠島のほか過料を含め処罰者約一万人という、日本一揆史上稀にみる膨大な犠牲者を出す。一揆の鎮圧と検地の完了により郡代に昇進。妻は夫の酷政を諫めて自害。

俳諧を好み俳壇水音社を興し初代宗匠。安永七年（一七七八）に失明。享年推定五十。（岐阜県史）

【飛騨人物事典】



朧夜の星は寿々みて田にしかな 楚諾

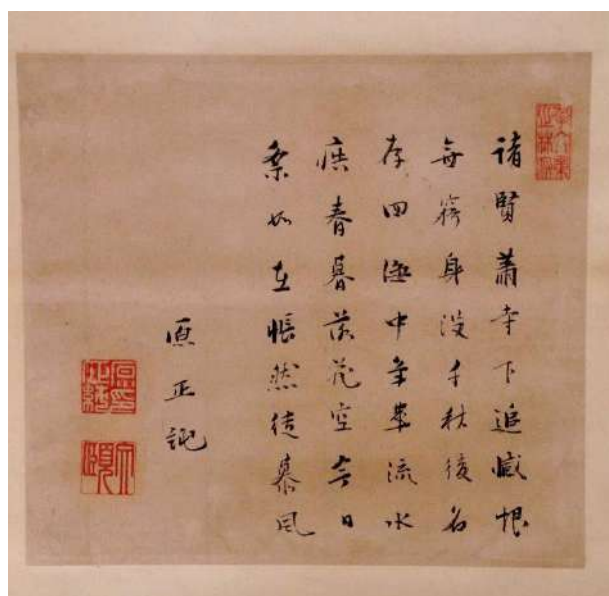
二、第十三代郡代 大原 亀五郎「おおはら・かめごろう」

生年不詳〜文政六年（一八二三）

飛騨郡代。名は正純。字は文頤。号を赤城。攀桂閣主人・青松園主と称する。

病死した父彦四郎の後を受け天明一年（一七八一）七月十七日、十三代郡代就任（十八歳）。明和、安永の騒動での出費、郡代就任のための田沼意次への贈賄、天明の飢饉、高山大火などで財政が逼迫し、庶民の反感を招く施策をとる。①一条金と称する六千余両の強制的な借り入れ、②天明飢饉の時の年貢安石代の返金分の強制的献金、③百姓救助金の使い込みなどによって、天明の大原騒動に発展。江戸へ召喚され、寛政一年（一七八九）十二月二十五日に八丈島へ流刑の判決。在島二十二年で許されて江戸へ帰る。著書『丙午詩集』。享年六十。（高山市史・飛騨春秋・紙魚のやとり）

【飛騨人物事典抜粋】



諸賢蕭寺下追憾恨
無窮身没千秋後名
存四海中年華流水
疾春暮落花空今日
祭如在悵然徒慕風

■正純

三、第二十一代郡代 小野 高福(朝右衛門)「おの・たかよし(あさえもん)」

生年不詳、嘉永五年(一八五二)閏二月二十八日

二十一代飛騨郡代。朝右衛門と称する。山岡鉄舟の父。弘化二年(一八四五)八月二十四日、御蔵奉行から高山陣屋に着任。前任の豊田郡代の天保の改革の後を受けて、その維持に努める。飛騨地域にある丙午生まれの迷信の打破や、宗門人別帳が形式的になっていたのを実際に即させ、八十歳以上の長寿者を賞する。外国船渡来の形勢を考えて城山で狼煙の実演をしたり、嘉永五年(一八五二)閏二月には上野平で教練を行なう。高福の喪は六月五日まで秘された。享年七八歳。(丹生川村史・飛騨編年史要)

【飛騨人物事典】



勢田曝網
せたにあみをさらす
とうさんのつき

東山月

一色紅天
いっしよくのこうてん

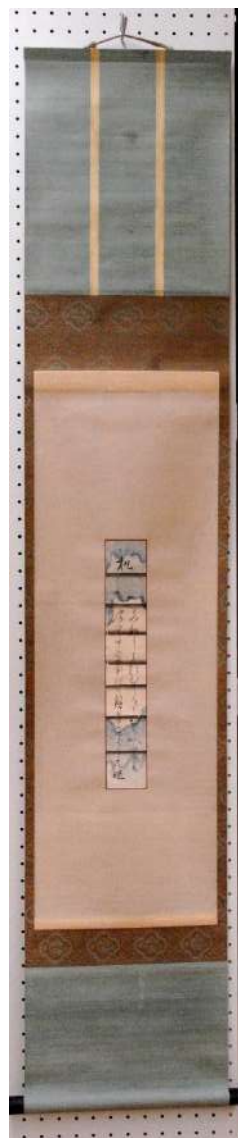
両景光
りようけいひかる

四、第二十四代郡代 高柳 元暉(小三郎)「たかやなぎ・もとちか(こさぶろう)」

二十四代飛騨郡代。小三郎と称する。元治一年(一八六四)に御勘定組頭から転ずる。將軍の長州征伐のため献金勧誘に努力する。越前本保障屋に出張していて病死。(飛騨編年史要・高山市史・飛騨史料)

【飛騨人物事典】

生年不詳、慶応一年(一八六五)十月十九日



机

文机に夜昼もなくむかえども

つむ甲斐なきは月日なりけり

元暉

第二章 陣屋役人

代官・郡代と接する機会の多い役人たちは、真っ先に最先端の知識に遇する機会を得られた。

五、飯山延昌(治右衛門)「いいやま・のぶまさ(じえもん)」

生年不詳、明和八年(一七七二)一月十一日

書家・飛騨地役人。篠助・治右衛門と称する。名は和楽。字を不白。白隠禪師から千山不白の縫合を受ける。書を細井広沢(江戸前・中期の書家)に学び、篆・隸・草書に優れる。剣術は川上立水に学ぶ。俳諧もよくした。上倉老梅子著『俳夜灯』を筆記。享年五七。(紙魚のやとり・斐山語草)

【飛騨人物事典】



満 月



金 精
玉 英

六、井田 至芳〔いだ・しほう〕

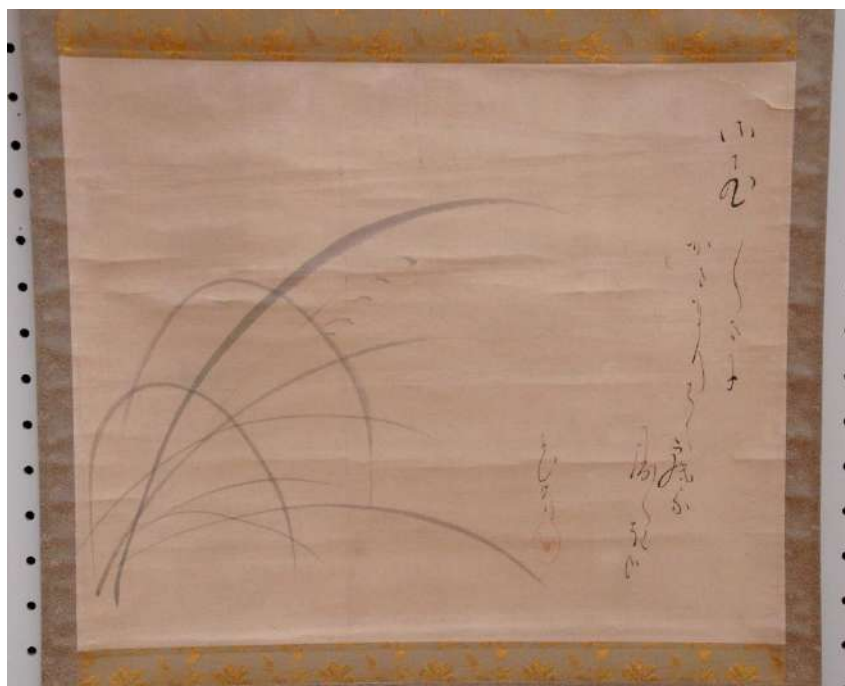
生年不詳、明和八年（一七七二）九月七日

飛騨代官の柴村藤右衛門盛喬の元締・俳人。江戸の人。柴村に従って寛延三年九月着任。通称は嘉藤次。号を風菊房・古珍・杉雪楼。加藤歩簫が「元締井田嘉藤次、吟味並びに諸御用向等古今の達人」と褒めている。飛騨俳壇の振興に貢献。高山を去るに当たって、芭蕉の真蹟及び俳器を法華寺へ奉納したが現存しない。野口午有の遺稿『みつけしき』と、甲州草々庵梅堂編の芭蕉翁建碑記念『甲斐塚集』の、いずれも序文を書く。江戸で没。（飛騨史壇）

【飛騨人物事典】



さひくさにかさなりて寝る ■ 沙々々と



七、館 柳湾[たち・りゅうわん]

宝曆十二年(一七六二)三月十一日、弘化一年(一八四四)四月十三日

江戸中・後期の漢詩人。越後の人。通称は雄次郎。号は石香斎。字を枢卿。

寛政十二年(一八〇〇)四月に飛騨郡代・小出大助の元締として着任し、文化二年(一八〇四)退任。赤田臥牛らと交わる。著書『柳湾漁唱』には飛騨での作品が多い。編著『林園月令』。(高山市史・日本歴史人物事典)

【飛騨人物事典】



野路停鞭處西山暗暮霞鐘聲煙

外寺燈火樹間家行役難云苦詩情

還自賒祇愁明月雨閣々認鳴蛙



薰風拂野爭看射柳之弓

(薰風野を拂いて争い射柳の弓を見る)「五月の風が野をわたって争うように吹く。射柳の弓の様を見るようだ」
※射柳：古の遊戯。端午の日に枝を毬場にめぐらし馬を馳せてこれを射るもの

第三章 文学者(近世)

市井の民の中でも、もたらされた知識を学び、また独自に知識を求める者が居た。

八、森 江鷗「もり・こうげき」

承応二年(一六五三)〜享保十六年(一七三一)七月十九日

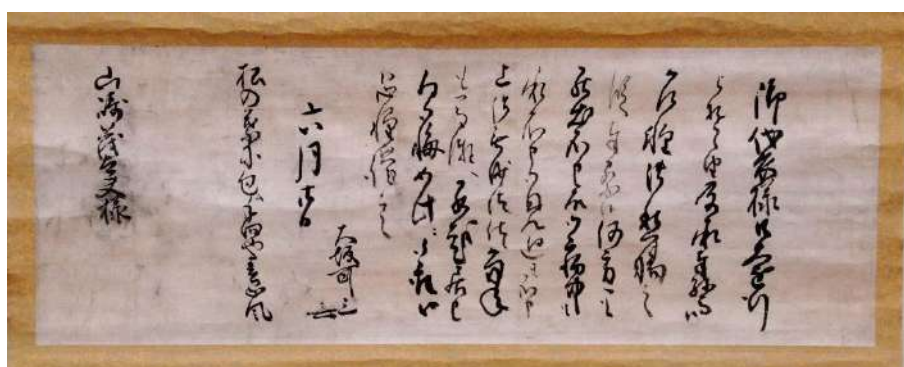
俳人・富商。古川郷古川町方生まれ。森与治兵衛の子。幼名は与三郎。名は孝政・賀禅。号は可参隠子。通称を彦兵衛。

高山の親族の守八郎兵衛に養われ一家を立てて大坂屋治助と称する。後に小森姓を名乗る。宝永五年(一七〇八)に飛騨で最初の句集『久羅井山』を編集し出版。俳句結社「雲橋庵」を創立して初代宗匠。(飛騨史壇)

【飛騨人物事典】



松の葉に包ム手向や春嵐



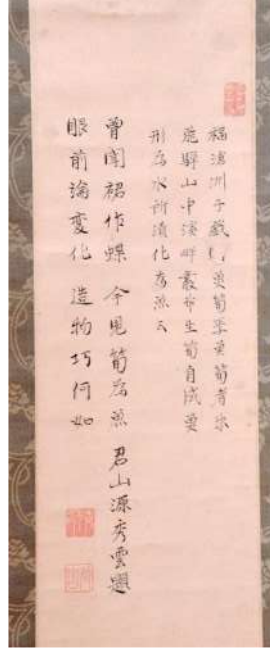
九、津野 滄洲「つの・そうしゅう」

享保三年（一七一八）〜寛政二年（一七九〇）七月二十三日

養蚕功労者・石器収集家・酒造業・糸問屋。高山二之町の人。名は義見。号は蒲公英主・金華主人・金華三愛主・○徳斎。字は有鄰。通称を福島屋五右衛門。

飛驒の養蚕振興のため三河で蚕の飼育方法を習得して帰り、飛驒各地で指導。さらに三河などから蚕種や桑苗を求めて無償で配布。こうした私財を投じた努力が実って、飛驒の生糸と紬の生産額は五十倍以上になる。この功により名字帯刀を許される。詩文、俳句、狂歌をたしなむほか石器収集・研究の草分け的な存在。著書『金華三愛集』『飛州燕石録』ほか。（飛驒人物考・斐山語草・飛驒史壇）

【飛驒人物事典】



ささ魚の夢はさめたり初あらし

飛ダ多加山 滄洲

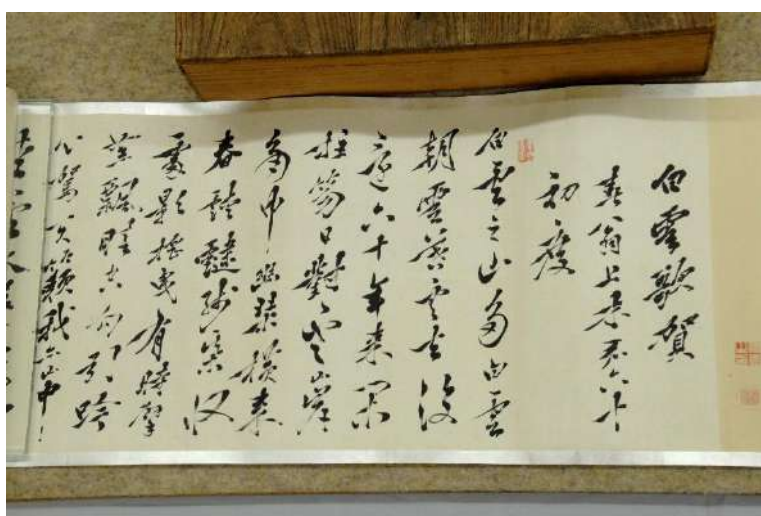
十、上木 清成(重膺)「うわぎ・きよなり(あつむね)」

寛政九年(一七九七)〜文久二年(一八六二)四月八日

国学者で荏名門の四傑。名は重膺、幼名は太郎。号は倭文舎・春翁。通名を清九郎・甚四郎。上木重郷の長男。

代々酒造業を営む高山の商家。国学を田中大秀に学ぶ。古典の研究、雅楽、謡曲、茶道に優れ多くの弟子を育てる。文久元年(一八六一)、不起の病と知ると門人を自邸に集め、富田礼彦に就いて学ぶよう言い聞かせ、礼彦を招いて師を交替する式を行なう。著書『万葉集櫛之枝折』十五卷、『歌文集』十一卷。明治二十七年(一八九四)に孫の上木清根が遺稿を集め『倭文舎集』一卷を刊行。(高山市史・飛騨人物考)

【飛騨人物事典】



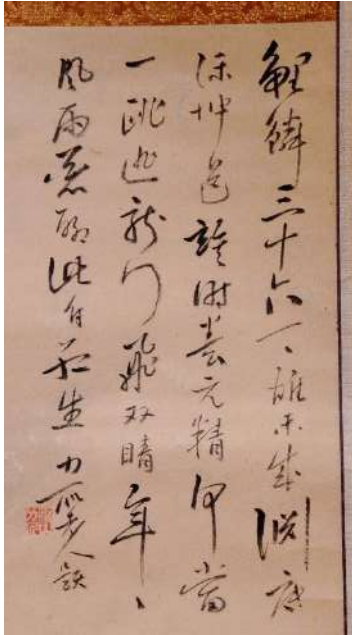
義父還暦賀屏餘帳 全五卷

十一、桐山 力所「きりやま・りきしよ」

文化七年（一八一〇）～安政五年（一八五八）十二月十六日

郷土史家。高山二之町生まれ。浄所の子。幼名は佐六、後に新兵衛・新五郎、晩年は新五兵衛。名は震。字は尉敦。通称を勘兵衛。家を
 倘徉園と号する。赤田章斎の門に入り詩文をよくする。書・絵画・雅楽・茶道に通じ門人が多かった。晩年は家を中所に譲り、京都の小野
 宮増護大僧正の門に入って、当時の町民としては最高の桐香印敦公法橋力所大居士の法号を受ける。著書『飛騨遺乗合府』『飛騨群鑑』『飛
 州志拾遺』（飛騨編年史要・飛騨文教史・丹生川村史）

【飛騨人物事典】



鯉鱗三十六一、雄未成淵底
 保坤色■時養元精何當
 一跳逃龍門飛双晴年々
 風雨荒聊此和生 力所老人

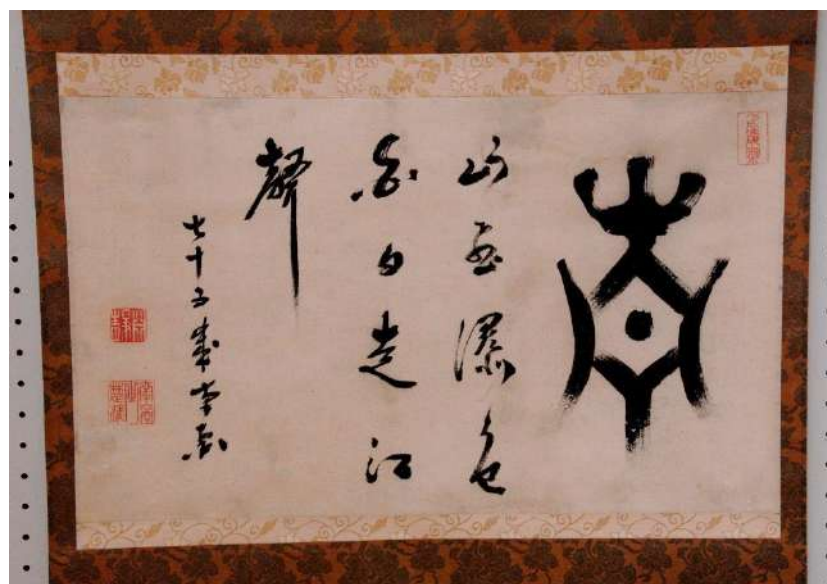


十二、南裔 楚雄「なんねい・そゆう」

高山市宗猷寺十世・笠ヶ岳の開山・篆書の大家。丹生川村三之瀬生まれで俗性は山下。真竜山人と称する。同寺の法弟を経て、江戸へ出て仏典を研究する傍ら三井親和に書を学ぶ。上宝村岩井戸にある字書き岩は、元々は南裔の書「万古不易」を彫ったもの。天明三年（一七八三）六月、笠ヶ岳を開いて本地仏を安置。（飛騨人物考・丹生川村史）

【飛騨人物事典】

生年不詳／文化三年（一八〇六）九月十一日



青

山飛瀑色

白日走江

聲

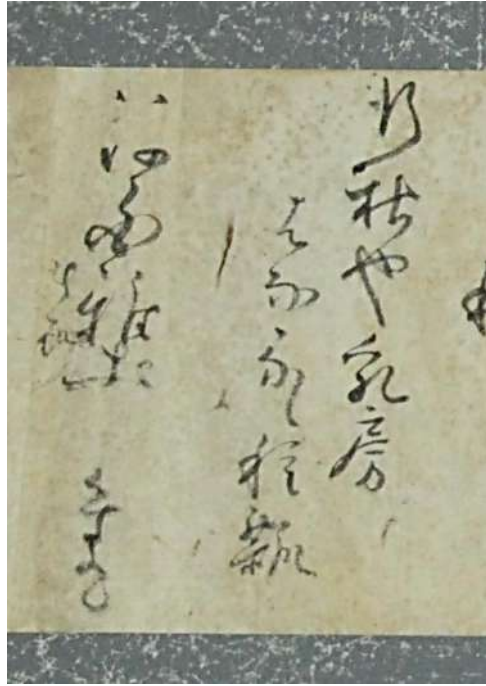
七十五歳南裔

十三、野口 午有〔のぐち・ごゆう〕

御役所御出入医師・俳人。越中富山の人。補透主人・養安と称す。

高山へ移住し開業。江戸から高山に移住していた俳人の井田至芳と親交深く「雲橋庵」四世宗匠を継ぐ。句集『美津氣之記（みづげしき）』を編集。（高山市史・斐山語草）

生年不祥、寛延四年（一七五二）二月二十二日



行秋や乳房になるゝ種瓢

【飛騨人物事典】

十四、野口 兎来「のぐち・とらい」

享保八年（一七二三）〜寛政四年（一七九二）十二月二十四日

御役所御出入医師・俳人。高山の人。午有の長男。初名は元安。通名を養安。号は片月窓・月窓・枇杷亭。

医学と俳諧を父に学ぶ。宝暦三年（一七五三）父午有の編んだ井田至芳序、兎来跋「美津気之記」を上梓。享年七〇。（高山市史・飛騨俳家人名録）

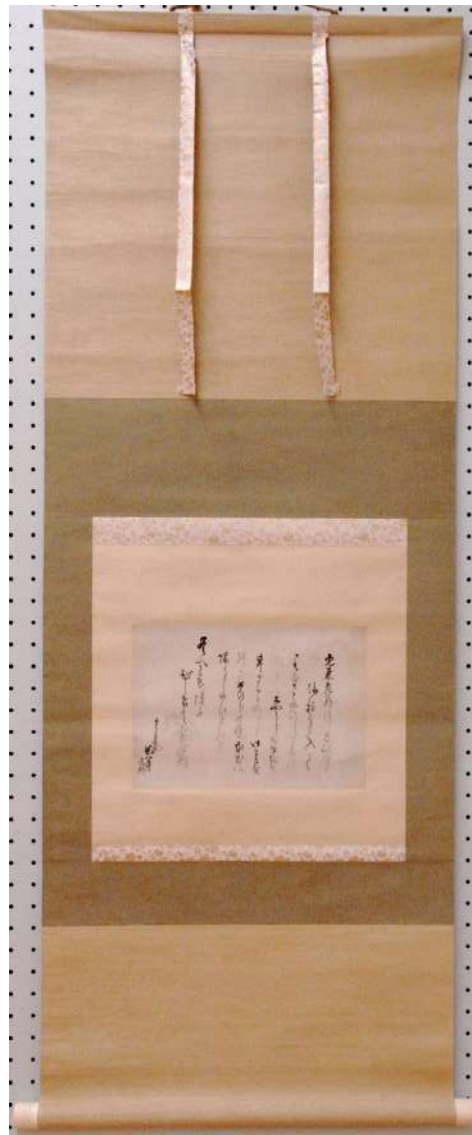
【飛騨人物事典】



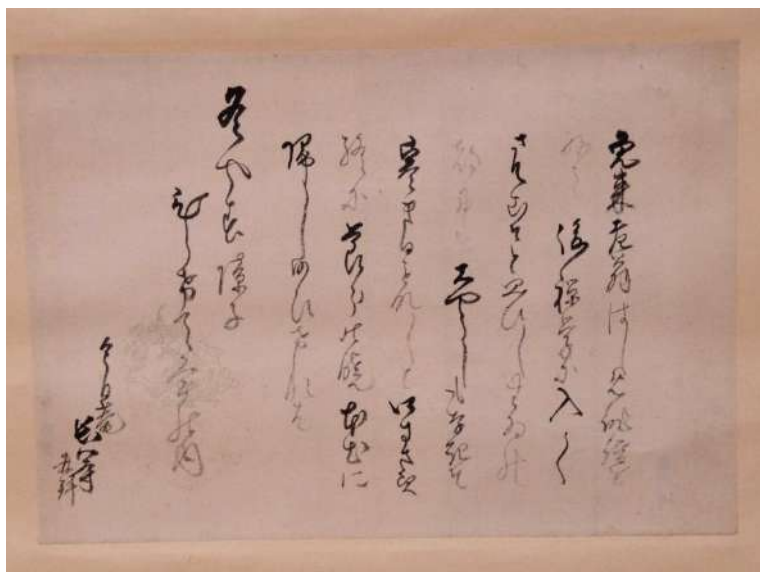
人を見ぬ人の往来やけふの月 兎来

十五、平田 長等〔ひらた・ながら〕

俳人。名は友直。字を子温、今日庵。通名忠次郎。
俳道の造詣深く佳吟多い。「雲橋社」元勲。



生年不詳、文化元年（一八〇四）三月八日



冬や春障子ひらけて■の内

十六、加藤 歩簫「かとう・ほしろう」

雲橋社中興の俳人で五世。高山二之町生まれ。玄俊の子。名は貴雄。通称は小三。号を蘭亭・志羅々翁・白翁・里秋。五升庵蝶夢に俳諧を、伴蒿蹊に国学を学ぶ。父の私塾を継いで、田中大秀、赤田臥牛ら多くの俳人・学者を輩出。文化十三年（一八一六）西茂住の山峡に俳人・野沢凡兆の遺詠地を探して岸壁に「驚の巢の樟の枯枝に日は入ぬ」を著し彫らせる。図書千冊余を収集して「雲橋社文庫」を開設。これは飛騨初の公開文庫。昭和三年（一九二八）に従五位を追贈される。墓は東山法華寺。著書『紙魚のやとり』『ゆききの旅つと』『蘭亭尚齒卷』『よしなし草』など。（高山市史・丹生川村史）

【飛騨人物事典】

雲橋社「うんきょうしゃ」

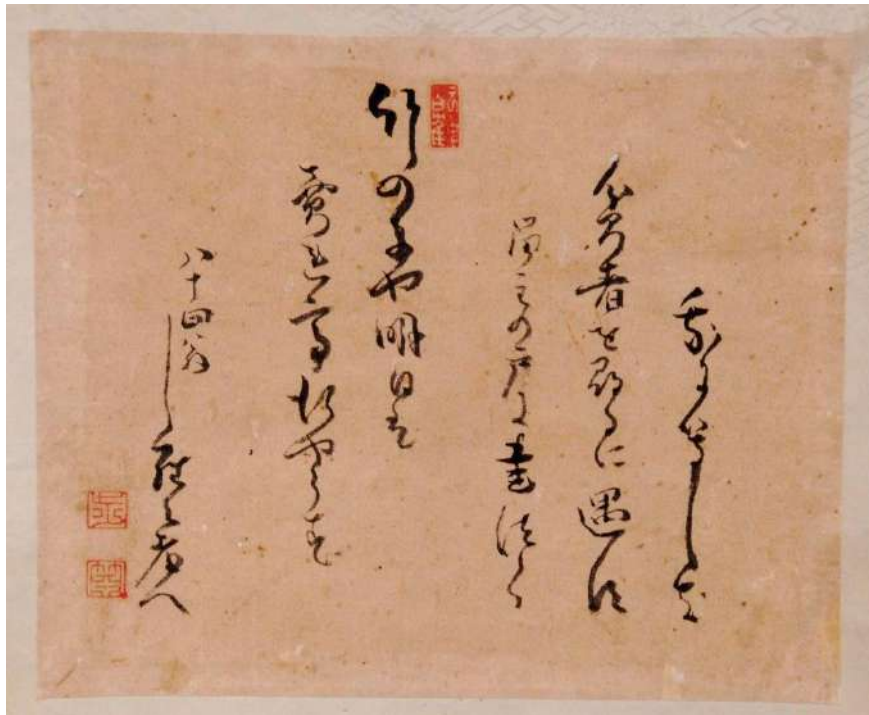
幕末紛乱の世に際し、雲橋社の耆宿前後調謝して、社運漸く衰頹に傾いたが、加藤越翁独恬淡として社童と共に残燈を守り俳諧の維持に努めて来た。斯くて明治初期を過ぎて文運漸く振興し、桃村・周可・小湖・柄齊等相次ぎて社中の人となった。

明治十九年福田蕉滴県会議員として岐阜市に往来したが、時の知事小崎我々亭蕉滴に勧めて獅子門道統第十七世棚橋碌翁の門に入らしめた。爾来蕉滴・原長松・上木可中・日下部雨外・古島夕景・柿下得園・野中井蛙等と語らい瓢箪会を組織し、時々俳筵を開いた。

然かし適当な指導者がないので、越翁に請いて雲橋社第四世の立机式を挙げしめた。

奥村野秋歿後雲橋社文机空しく庫中に藏せられること茲に三十二年、終始正風俳統を死守して来た越翁・掃月の功績を思わねばならない。明治二十四年十二月二十四日可中庵に於て瓢箪会の納会を開き、席上掃月・雨外を双方の代表とし、瓢箪会を雲橋社に併合する議を決し、爾来毎月二、三回俳席を開いて研究を継続した。

【高山市史下巻】



我にひとしき

貧者をたずぬるに会えず
留守の戸に書きつく

竹の子や明日は

売られていくようす

八十四翁 し羅々翁

十七、赤田 臥牛「あかだ・がぎゅう」

延享四年（一七四七）～文政五年（一八二二）七月二十二日

儒学者。高山一之町の人。初名は朱義、後に元義。通称新助。号を臥牛山人・白雲山樵。酒造家の生まれ。信長に敗れた六角義弼の将・赤田信濃守の子孫という。

勝久寺の瑞雲雪峰に論孟と五經の句読を受ける。津野滄洲は臥牛の才能を惜しみ、尾張の松平君山、浅井凶南、江戸の宇野明霞、館柳湾（飛騨郡代の元締手代で詩人）などに紹介した。これらに師事した臥牛は、飛騨において不動の地位を築く。江村北海（江戸中期の漢詩人の『日本詩選』（安永二年（一七七三）に詩四首が載る。文化二年（一八〇五）には、官許を得て自邸に「静修館」を開く（飛騨地方の学問所の初め）。皇室を尊ぶ気が篤く、津野滄洲と図って「籠の渡し」と「藤橋」の二図を描き、菅原長親を経て天覧に供し、その光栄を喜び「懸度行」の長詩一編を発表。

著書『臥牛集』。（高山市史・濃飛偉人傳・濃飛両国通史）

【飛騨人物事典】

静修館「せいしゅうかん」

赤田臥牛幼より学を好むも郷党師友なく出遊せんとするも父其遊行を喜ばなかった、津野滄洲（高山人）之を憫み為に尾張の松平君山・浅井凶南・近江の龍草蘆等と通交せしめた、是より名声漸く著はれた、臥牛年長するに従い学識益々進み、郷人多く其の門に入った、郡代田口五郎左衛門幕府の許可を得て臥牛の居宅脇に学塾を建てしめた、静修館即ちこれである。

文政一年（一八一八）から父臥牛に代わって、章斎が教授、天保三年（一八三二）十一月大火で静修館が焼失したため高山馬場通り海老坂上に再興した。弘化一年（一八四四）九月には神明町角に移築。誠軒は父祖の業を継いだ、明治一年（一八六八）高山県知事梅村速水から学問取締方を命じられたが、梅村の治政方針に合わず静修館を閉じた。

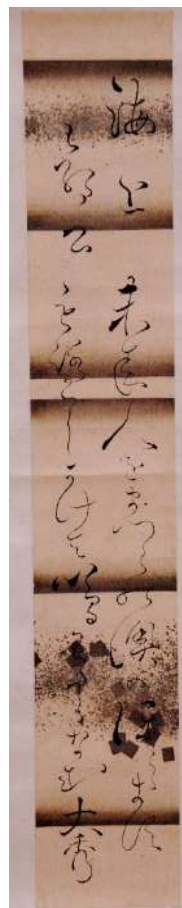
【高山市史】



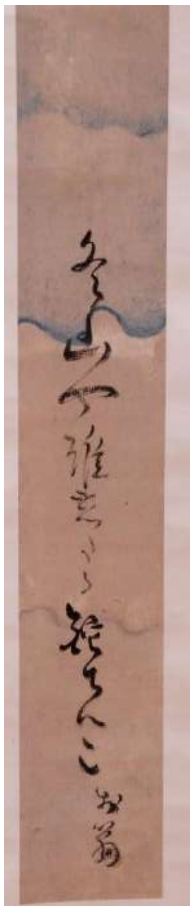
紫門寂掩扇
月黒梅花白
中為読書軒
不知是何客
(詩書・臥牛)



赤田臥牛・田中大秀・加藤歩簫 貼り交ぜ掛け軸



海上 こぬ人をまつらの澳のほととぎす
郭公 もろこしかけて鳴りわたるなむ 大秀



冬山や誰忘たる蛇てはこ 歩簫

十八、田中 大秀「たなか・おおひで」

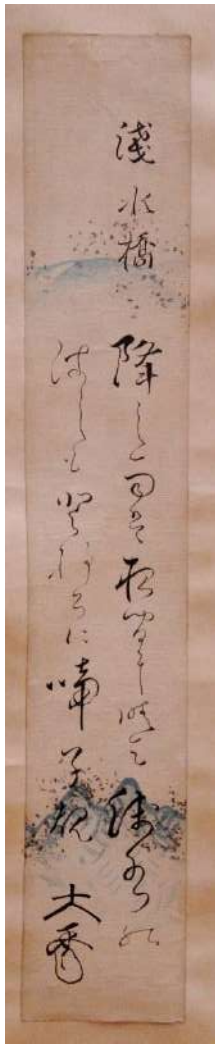
安永六年（一七七七）八月十五日、弘化四年（一八四七）九月十六日

国学者。高山一之町の薬種商の家に生まれる。通称は弥兵衛・平之丞。号を紀文。後に大秀と改める。別に八月満・湯津香木園、晩年は荏野翁・荏野老人・三酉。自庭を千種園と呼ぶ。

幼より読書詠歌を好み栗田知周、伴蒿蹊らに学ぶ。享和一年（一八〇一）本居宣長の門に入り、没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛騨に初めて国学を伝え、多くの門人を擁した。敬神勤皇の念篤く、文政一年（一八一八）に荏名神社、同四年（一八二二）に飛騨総社を再興。歌学、管弦も教授。大正四年（一九一五）御即位の大典に当たり正五位。

著書に『竹取翁物語解』『養老美泉弁』『荏野冊子』『土佐日記解』他。（高山市史・丹生川村史）

【飛騨人物事典】



浅水橋 降りし雨は夜間に晴れつ浅水の

橋もとどろに啼く子規 大秀

大秀翁四季詠・春夏秋冬(長歌・反歌・短歌)

(右隻)



(左隻)



(右隻)

元日

三冬より一冬もあらずの位に赤松の朝日ほく背面は三枝
雪も能く軒に下りて多き多き里の民を元日詣に執りて
御寄の御能くさる初春の古事なりとて玉手此大進山の
可い豊作實は、やうとて、あまのけしき御代にて新
玉のほくは今日の日なり

春風春水一時来

日 鶯 我 梅
春風春水一時来 鶯 我 梅
春風春水一時来 鶯 我 梅
春風春水一時来 鶯 我 梅

野遊

梅邊酌月 園花 梅邊酌月
梅邊酌月 園花 梅邊酌月
梅邊酌月 園花 梅邊酌月
梅邊酌月 園花 梅邊酌月

曲水宴

古野山 曲水宴 古野山
古野山 曲水宴 古野山
古野山 曲水宴 古野山
古野山 曲水宴 古野山

夏衣

夏衣 夏衣 夏衣 夏衣
夏衣 夏衣 夏衣 夏衣
夏衣 夏衣 夏衣 夏衣
夏衣 夏衣 夏衣 夏衣

昌蒲

昌蒲 昌蒲 昌蒲 昌蒲
昌蒲 昌蒲 昌蒲 昌蒲
昌蒲 昌蒲 昌蒲 昌蒲
昌蒲 昌蒲 昌蒲 昌蒲

遊瀧

遊瀧 遊瀧 遊瀧 遊瀧
遊瀧 遊瀧 遊瀧 遊瀧
遊瀧 遊瀧 遊瀧 遊瀧
遊瀧 遊瀧 遊瀧 遊瀧

—24—

十九、大森 旭亭「おおもり・きよくてい」

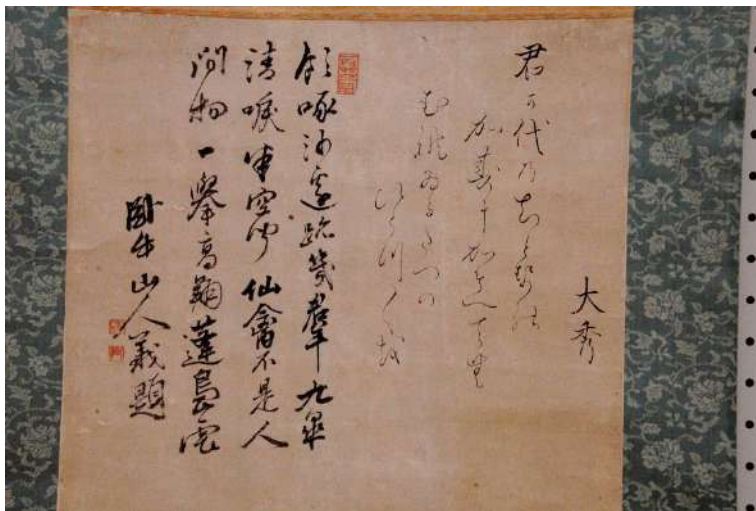
篆刻家。船津町の人。通称は仁右衛門。名は豹。字は文尉。号を石雲斎。屋号は庵屋・下木戸。白木類を扱い酒造業を営む。京都の芙蓉翁に篆刻を学ぶ。特に古印譜を研究して技術は神技と言われ、富山方面に弟子が多く富山市中野に旭亭翁碑がある。文化年間、高原郷の自然と村々を鳥瞰図的に描いた「高原絵巻」上下二巻を完成。俳句、尺八、三絃をたしなむ。享年七七（飛騨編年史要・高山市史）

生年不詳、文政十二年（一八二九）八月十二日

【飛騨人物事典】



画 大森 旭亭



君が代のちとせの

加寿をかぞえてむ

無れゐるたづの

ひとつくを 大秀

餘啄沙辺路幾群 九皐

清唳半空聞 仙禽不是人

間物 一挙高翔蓬島雲

臥牛山人義題

二十、三島 正英(勘左衛門)「みしま・まさひで(かんざえもん)」

寛延二年(一七四九)一月五日、天保三年(一八三二)十二月一日

孝子。上木甚兵衛の次男。高山町に生まれ白川郷一色村の生家・三島家を継ぐ。初名を甚助。通称を勘左衛門。号は酔狂山人。実父の勘兵衛が大原騒動で新島へ流罪となり、その病の報に接して、看護のため寛政三年(一七九二)に渡島。父の没後も一年間は島にとどまって喪に服す。同十二年帰郷。著書『天明水滸伝』『深山世婦子鳥』ほか。(飛騨編年史要・高山市史・ひだびと)

【飛騨人物事典】



奉賀 身脩家■無心 異■即■春又新

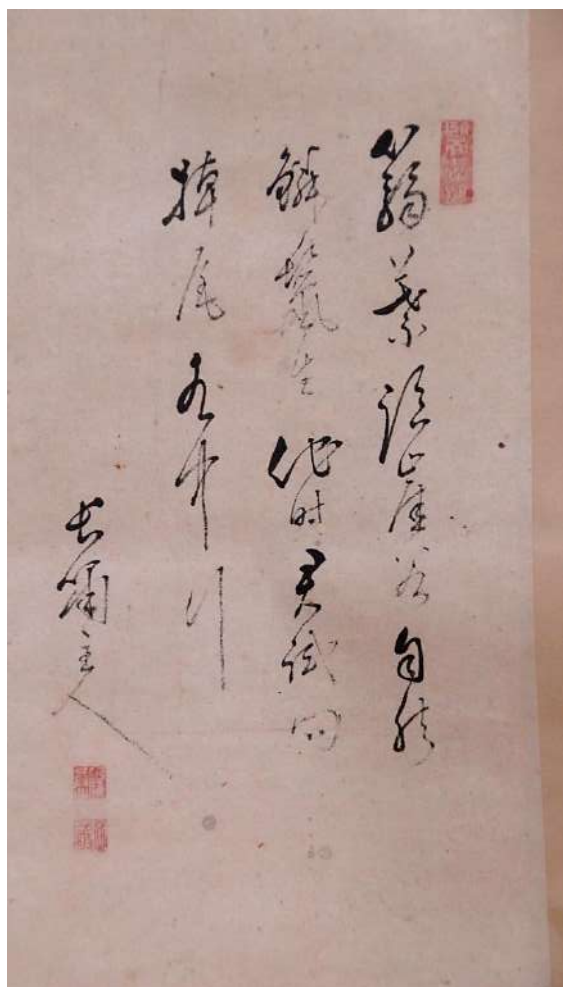
一門為同奉萬寿 鳳其千歳侶尊親 正英

二十一、二木 長嘯[にき・ちようしょう]

宝暦五年(一七五五)二月二十六日、文化十一年(一八一四)六月十日

石器収集家・酒造業。二木家七代目。高山二之町の人。呂竹の長男。初名は孫三郎、後に俊恭。字は子敬。長右衛門と称する。赤田臥牛と尾張藩の学者・松平君山に師事。心学に熱心で、人心を救おうと国内を一年余り巡る。石器収集家として日本的に著名で木内石亭と交わり、石器類五十点などが国重要美術品となる。久々野村木賊洞村の險路を改修。天明年間(一七八一〜八九)に白川郷で天然痘が発生すると、京都から薬を取り寄せて郷民を守る。絵をよくする。著書『神代石図』ほか。(飛騨偉人銘々伝・飛騨人物考)

【飛騨人物事典】



■葉陰崖谷 自然

鱗■生 他時君試賦

掉尾有中引

二十二、蒲八十村〔かば・やそむら〕

文化九年（一八一二）十二月十五日、慶応二年（一八六六）五月二七日

歌人・手習い教授・能書家・酒造業。古川の人。蒲正茂の長男。通称は小島屋。幼名は永太郎。冬磨・晴海・与三兵衛・長右衛門と称する。号を田面舎・巨木蔭・樅蔭・樅亭・宜木川・漁叟・胡蝶亭。

赤田章斎に漢学、岩佐一亭に書を学び、特に田中大秀の門では四高弟の一人と称される。家塾を継ぎ、天保八年（一八三七）から手習い教育に従事し門人が多かった。池坊の華道にも優れる。文集、随筆など多数。（高山市史・飛騨春秋・飛騨偉人銘々伝）【飛騨人物事典】

白雲居 相常〔はくうんこ・そうじょう〕

生年不詳、慶応四年（一八六八）二月十七日

高山市の勝久寺の僧・画家。倪堂・梅丸と称する。勝久寺を退隠して白雲山の北麓に住む。画を近江の僧・玉麟に学び墨竹画が著名。華道は池坊、茶道は宗和流で門人が多かった。華道の「白雲社」を創設。享年八七（飛騨偉人銘々伝・斐山語草）【飛騨人物事典】



(右隻)



(左隻)



(右隻)

■記草の力もあらわれて

しおれぬ竹の春の色かな

八十村

はる残る分けの霜やしおらまし

ゆふかるさむくすさふ呉竹

八十村

ふく風のいささむら竹ふる雨も

音のかそけき■のゆふ暮

八十村



なおかれとはぐくみたつる竹の子も
一筋あらむすえをこそまで

八十村

老にける姿まじわぬ若竹の
ふくのはこびもかるきなるかな

八十村

よられつつ松やこの君かげろいて
すずしくさやぐ夏の夕風

八十村

(左隻)



音の葉が目にもさやかにみゆるまで

あきたきなびく風のたかむら

八十村

長き夜のふけゆくまに呉竹の

葉分けの露の月でおもれる

八十村

深みどりかわらぬ竹はくらく

ゆうべも■の色なかりれり

八十村



うつりゆく雲は嵐しむ晴るまも

竹の林の音ぞすぐる

八十村

八十年の霜をかさねてから竹に

とどこうりたるもと ■ ■ はもなし

八十村

折ふしのうつるながめところさえ

雪になびける冬の竹村

八十村

二十三、加藤 素毛[かとう・そもう]

文政八年(一八二五)十月十七日、明治十二年(一八七九)五月十二日

飛騨で初めて渡米した人・俳人。益田郡下原村生まれ。下原郷十六か村兼帯名主の加藤三郎右衛門の次男。幼名は藤平、後に十郎・雅英。号を周海・米行子・靈芝庵・君林舎。飛騨郡代の公用人を務め、後に江戸へ移り住む。万延一年(一八六〇)一月、幕府外国方御用達の伊勢屋平作の手代として江戸幕府の遣米使節に加わる。九月に帰国。アメリカでの行動、風物を克明に記録した素毛の「亜州周海日記」は日米修好史上の貴重な資料(金山町郷土館蔵)。句集『月の笠』『言葉の塵』。(金山町誌)

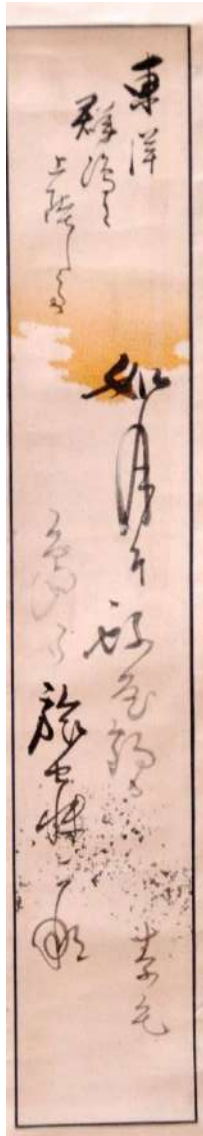
【飛騨人物事典】



「東洋群嶋に上陸して

如月に蚊飛散る島で旅寝かな 素毛」

(此の俳句は加藤素毛が幕府の遣米使節の一員として安政七年正月米国軍艦ポーハタン号にて出航せしが太平洋上にて暴風雨にあい途中で東洋群島(現ハワイ諸島)に上陸し漸らく滞在したその折りに詠んだ句である)

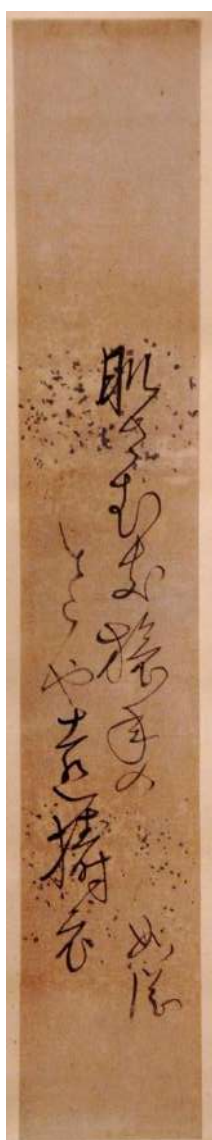


二十四、廣瀬 重武〔ひろせ・しげたけ〕

天保七年（一八三六）九月二十一日、明治三十四年（一九〇一）四月六日

高山区裁判所長。豊後竹田の人。俗称は友之允・安太郎・完蔵・健一・健六。岡藩士で勤王党に属し数度の弾圧を受ける。維新後は新政府に登用され大阪裁判所取調役など歴任。明治九年から初代・高山区裁判所長。軍神・広瀬武夫中佐の父。（飛騨編年史要・飛騨春秋）

【飛騨人物事典】



肌寒き旅寝のどこや遠擣衣

如潤

近代(明治・大正・昭和前期)

第四章 高山県知事

明治となり、廃藩置県が行われると、明治政府より任命された知事などから、日本全国、そして外国の知識を得られるようになる。

二十五、梅村 速水「うめむら・はやみ」

天保十三年(一八四二)〜明治三年(一八七〇)十月二十六日

初代高山県知事。本名は沼田準次郎。別名を千原精一郎・泉原静逸郎・秋元寒介・桜井誠一・佐倉静逸・梅村準。水戸藩士沼田泰晦の二男。

水戸学を学び脱藩して諸国を廻り勤皇派の諸士と交わる。明治一年(一八六八)三月十三日竹澤寛三郎から事務を引き継ぎ、内国事務局権判事として飛騨統治の任につく。梅村は二十七歳で高山県知事に任命され、翌明治二年(一八六九)三月十四日に解任されるまでの一年間に、有能な人材の登用、商法局の設置、高山人別米と山方米の廃止、徴兵制の実施、学校の建設など次々新しい政策を実施。急激な改革になじまない民衆と、不満を持つ旧地役人や商人の反対運動から暴動へと発展。暴動を鎮圧するため上京中の二月、火事場の喧嘩が発端で打ち壊しが始まり、飛騨全体で百五軒が焼かれたり壊された。暴動を知った梅村の帰りを、反対する一万人余の人々が、投宿した萩原の戸谷権十郎の家に押し寄せ火を放つ。梅村は胸を撃たれて負傷し、苗木城に逃げた。新政府は梅村を解任し四月に東京刑法官へ引き渡したが、罪状未決のまま伝馬町の獄中に死去。

【飛騨人物事典抜粋】



山里に新にさける菊の花深き いろかはけふよりぞ知る 波耶美

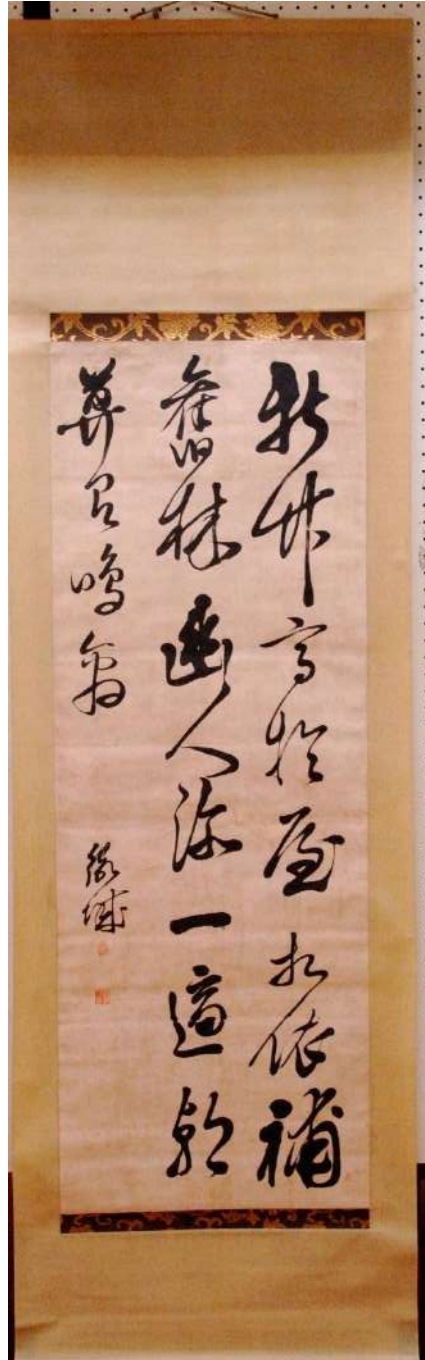
二十六、吉田 文助[よしだ・ぶんすけ]

天保十一年（一八四〇）五月十八日、明治三年（一八七〇）七月十日

高山県判事・勤皇の志士。高原郷吉田の常蓮寺了生の三男。幼名は藤丸。名は清徹。号は織城・雪岳・春橋。徹次郎・高原敬之進・藍民部などの別名を持つ。

豊後日田で広瀬淡窓の咸宜園に漢学を学び、約四年後には塾総監となる。勤皇の志士として活動し、慶応二年（一八六六）に同志と日田郡代の襲撃を企てるが、事前に発覚して逃れる。維新後は高山県判事に登用されるが、梅村騒動で免職。東京伝馬町牢に収監され未決のまま獄死。（斐山語草・濃飛文教史）

【飛騨人物事典】



新竹高於屋 相以補

旧林 幽人添一適朝

花開鳴禽

二十七、宮原 大輔(積)「みやはら・だいすけ(つもる)」

生年不詳、明治十七年(一八八四)九月五日

高山県権知事。もと因州鳥取の藩士。後に積と改名。号は海宇。

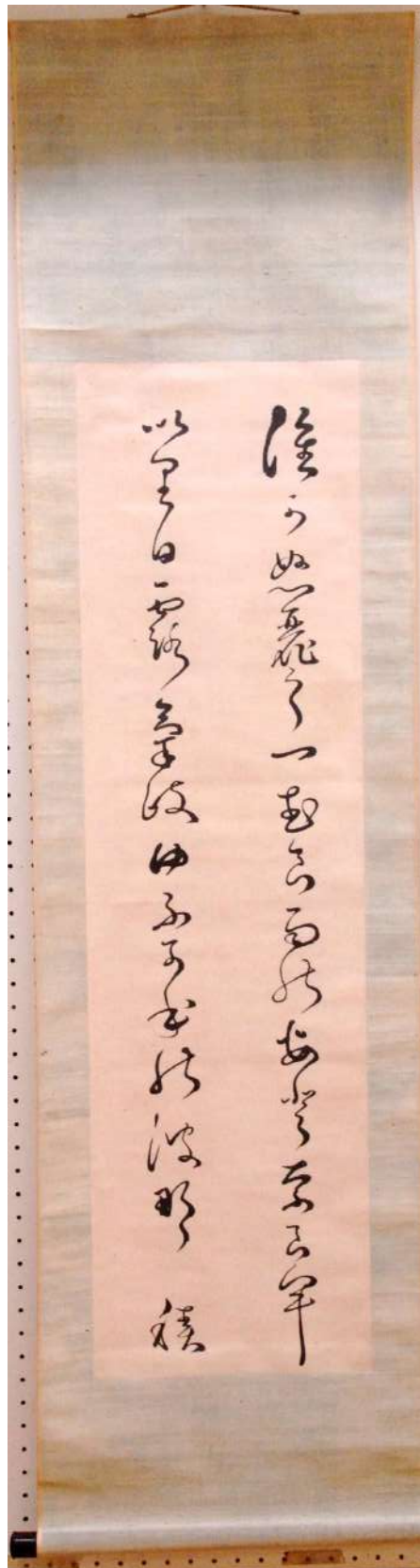
梅村・高山県知事が失脚し、明治二年(一八六九)三月に監察司として高山へ派遣され、判事を経て権知事。梅村騒動の原因となった県政を改めて民心の安定を図る。四年(一八七二)十一月二十日、高山県が廃され福島県権令となる。富田礼彦に『斐太後風土記』の編纂を命じる。詩歌、文章に長じ学問所「思誠館」を開く。『海宇遺稿』を門人の田中登がまとめる。享年六十二。(丹生川村史・高山市史)

【飛騨人物事典】



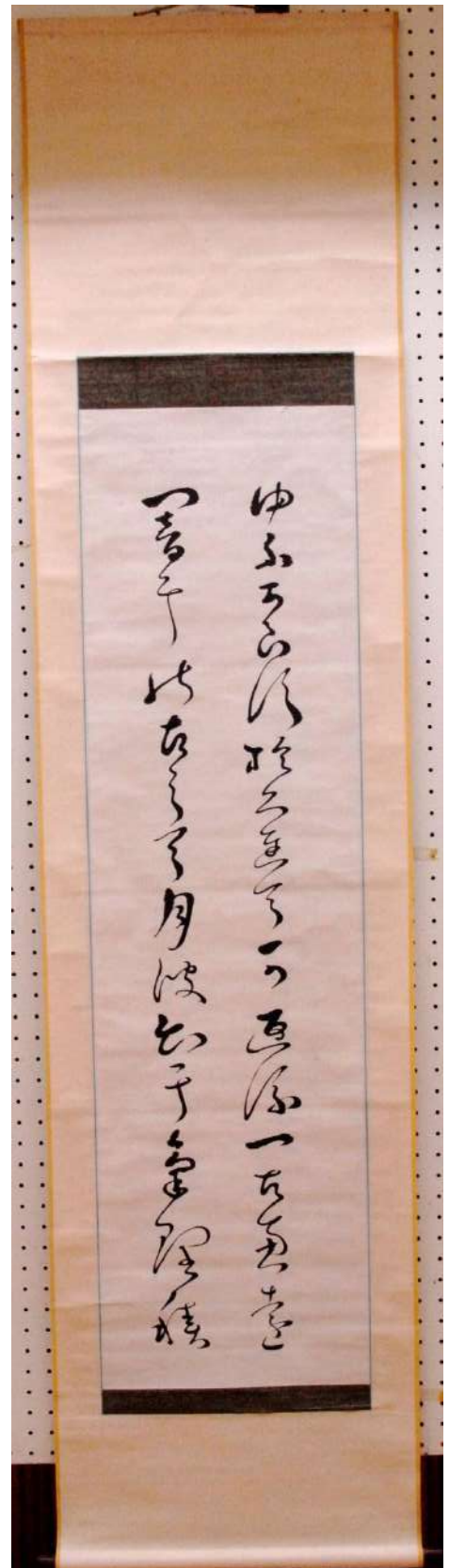
水花 水の花のくもの中道いつしかと

散りやかになりて目は積けり



誰かぬ麗し一むら雨のあとならむ

いり日露けきゆふがほのはな 積



ゆうがらすおくれて返る一声を

やみに残して月はい出にけり 積

第五章 文学者(近代)

藩制度の終りとともに知識の垣根も取り払われ、全国の文学者との交流が行われた。様々な文学結社が興り、隆盛を極めた。

二十八、永田 吉右衛門「ながた・きちえもん」

明治六年(一八七三)八月十五日〜大正七年(一九一八)二月二十六日

初代高山町長・富商。高山の人。道俊の子。幼名は尚次。号を不及・五松庵。高山町長三期、大野郡会議員、衆議院議員を務め政界で重きをなす。

また飛騨銀行頭取を始め濃飛農工銀行、飛騨電灯会社などの重役。俳句、茶道、弓道などを多趣味で、俳句では花陰会の一世宗匠となる。

【飛騨人物事典】

花陰会「かいんかい」

明治二十二年(一八八九)頃、高山町前越旭州の提唱に依って創立された俳壇で、漸次隆盛となり明治四十三年一月を以て、月次句会百五十回記念句碑を大隆寺に建てた。(句碑背面) 我が花陰会は明治二十二年に起こり今年四十三年一月を以て其第一百五十回を開くに至る茲に同人相謀り句碑を建設し以て記念となす。需に應し伊藤松宇書。明治四十三年四月花陰会主唱者長尾桃雨、勇伊助…(略)。

明治四十三年五月二十五日、五松庵不及宗匠の立机式を東照宮社務所にて執行し、五松庵立机披露句集を発行した。句集千八百余名一万四千句に及ぶ盛況であった。大正四年十月、花陰会月次句会二百回記念に城山正雲寺に芭蕉古池の句碑を建てた。大正七年二月不及宗匠歿し稍衰えたが、昭和五年六月茶仏庵壺仙其の統を嗣ぎ立机式を行った。

【高山市史】

[花陰会]文台



花陰会 句碑除幕式記念



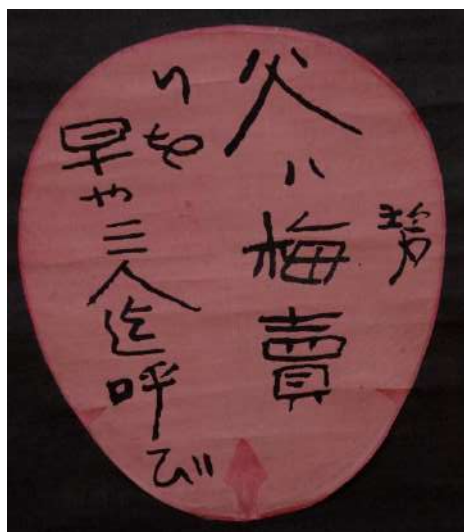
二十九、河東 碧梧桐「かわひがし・へきごとう」

明治六年（一八七三）二月二十六日、昭和十二年（一九三七）十二月一日

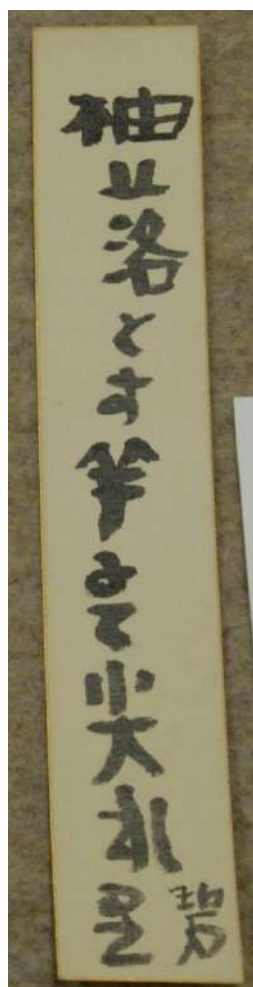
俳人。松山市生まれ。名は秉五郎。

正岡子規に師事し俳句革新運動に加わる。明治三十六年（一九〇三）ごろから新傾向俳句へ進む。旧習打破、真実探求、個性拡充の時代の風潮に刺激され全国を風靡する。四十二年（一九〇九）七月、続三千里の旅の途中、信州松本から高山へ来て若き日の瀧井孝作と出会い、孝作は歓迎句会で認められる。四十五年（一九一〇）にも再訪し高山の俳句界に影響を与える。四十四年（一九一〇）俳誌『海紅』を創刊。著書『碧梧桐俳句集』『新俳句』（日本歴史人物事典）

【飛騨人物事典】



父は梅賣
りを
早や三人迄呼び

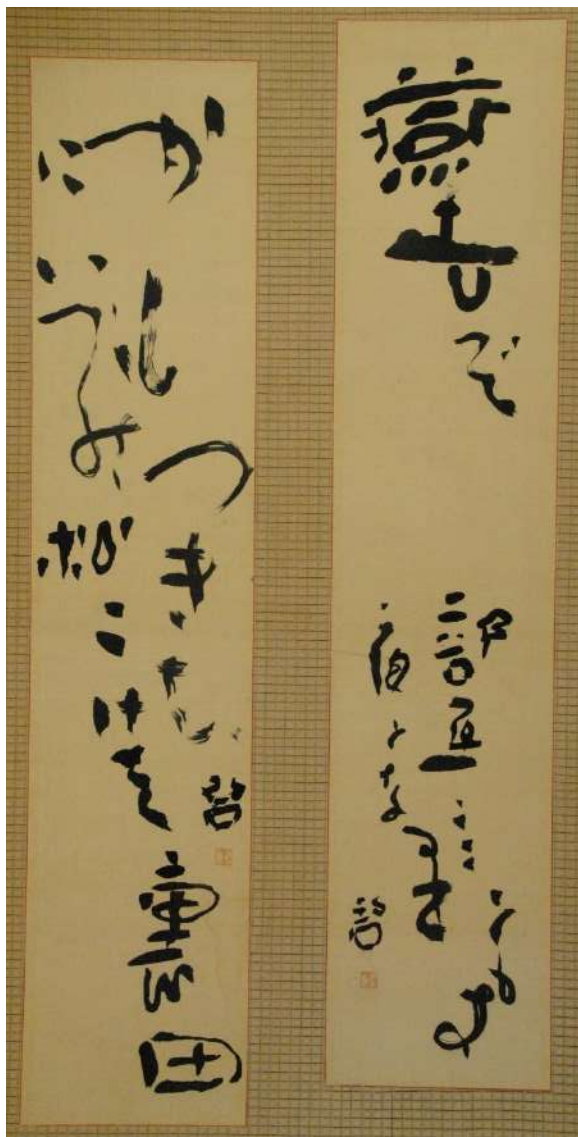


袖落とす竿にて尖れ里
碧



荷馬車に溜り藪傾くに蝶の空
山墓に水白し苺たゝむ雨

燕去んで部屋々々ともす夜となり
かもつきし裏田にいつの松こけて

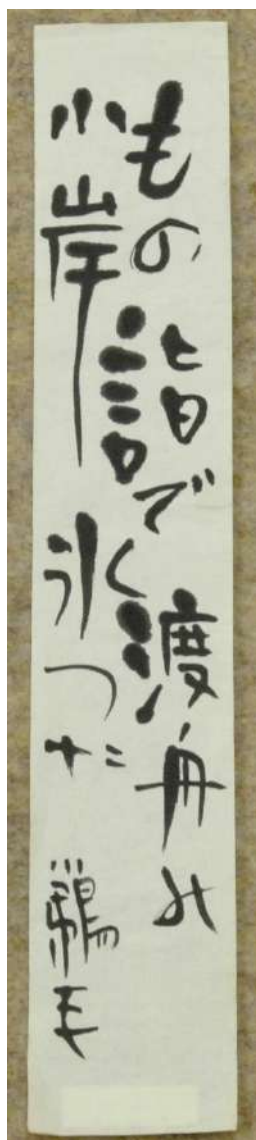


三十、塩谷 鵜平〔えんや・うへい〕

明治十年（一八七七）五月三十日、昭和十五年（一九四〇）十二月八日

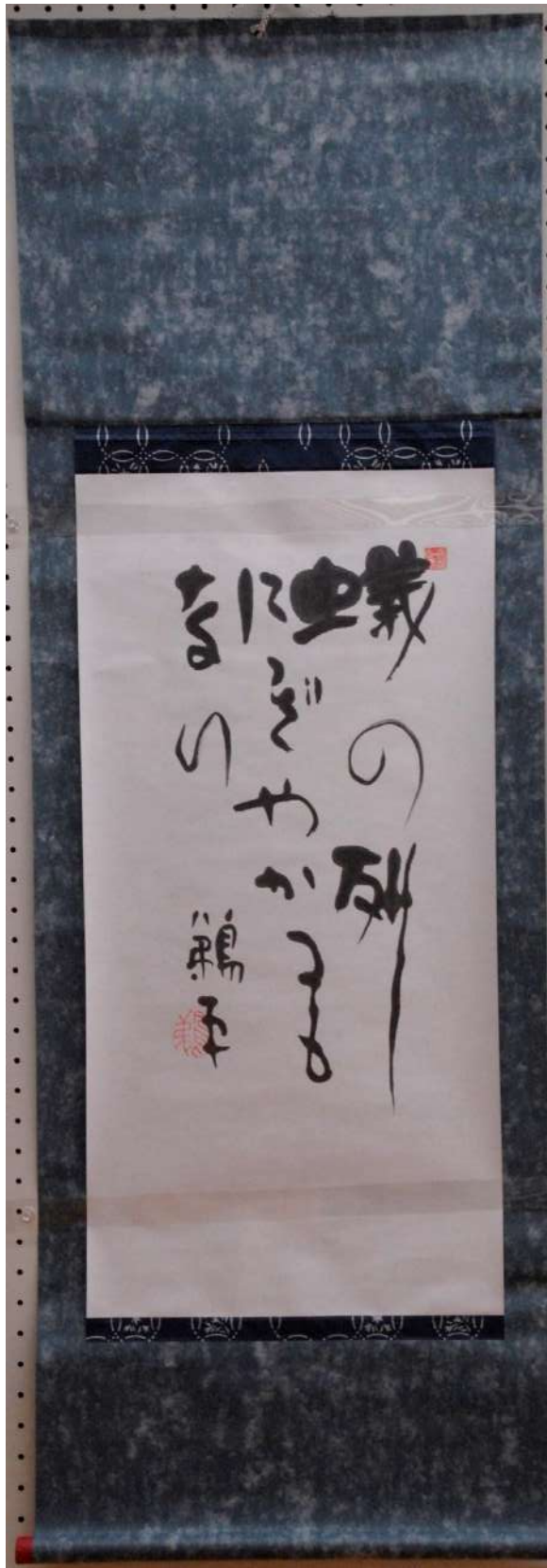
俳人。岐阜県裕福な地主の家に生まれる。塩谷宇平の長男。本名熊蔵、後に宇平。別号、芋坪舎・華園。東京専門学校（現在の早稲田大学）邦語政治科（現在の政治経済学部）卒業。農業を営む。俳句は中学から詠み始め、当初は正岡子規に師事しホトトギスに投句するも、新傾向俳句に移行していった河東碧梧桐に陶酔し、碧梧桐の門人となる。自身の句誌『壬子集』と合併する形で、碧梧桐が主宰する海紅に参加、自由律俳句を詠むようになる。海紅同人とともに、郷里の岐阜でも『鵜川』『俳藪』などの俳誌を次々と発行、とくに大正二年（一九一三）に発行した個人誌『土』は生涯に渡って続けられた。岐阜日日新聞（現在の岐阜新聞）俳壇担当。没後、海紅から鵜平追悼号が発行された。

【ウィキペディアより抜粋】

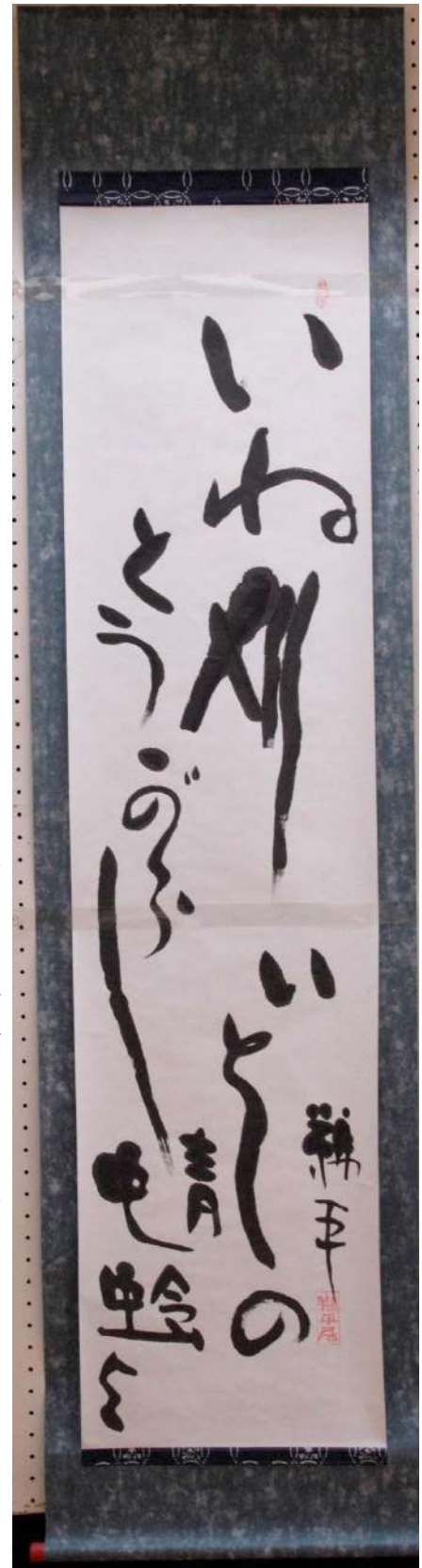


もの詣で渡舟の小岸氷つた 鵜平

蟻の列にぎやかになり
鵜平



いね刈いとしのとうがらし蜻蛉よ
鵜平



三十一、瀧井孝作「たきい・こうさく」

明治二十七年（一八九四）四月四日、昭和五十九年（一九八四）十一月二十一日

小説家・文化功労者。高山町空町（現大門町）生まれで東京都八王子市に居住。号は折柴。

河東碧梧桐に師事し俳句の道に入った。大正八年（一九一九）時事新報記者になり、このころから芥川竜之介、志賀直哉らの知遇を得て文筆活動が旺盛となり『飛騨高山』などの短篇小説や随筆を次々に発表。昭和二年（一九二七）代表作『無限抱擁』発表。『野趣』で読売文学賞（昭和四十三（一九六八））。

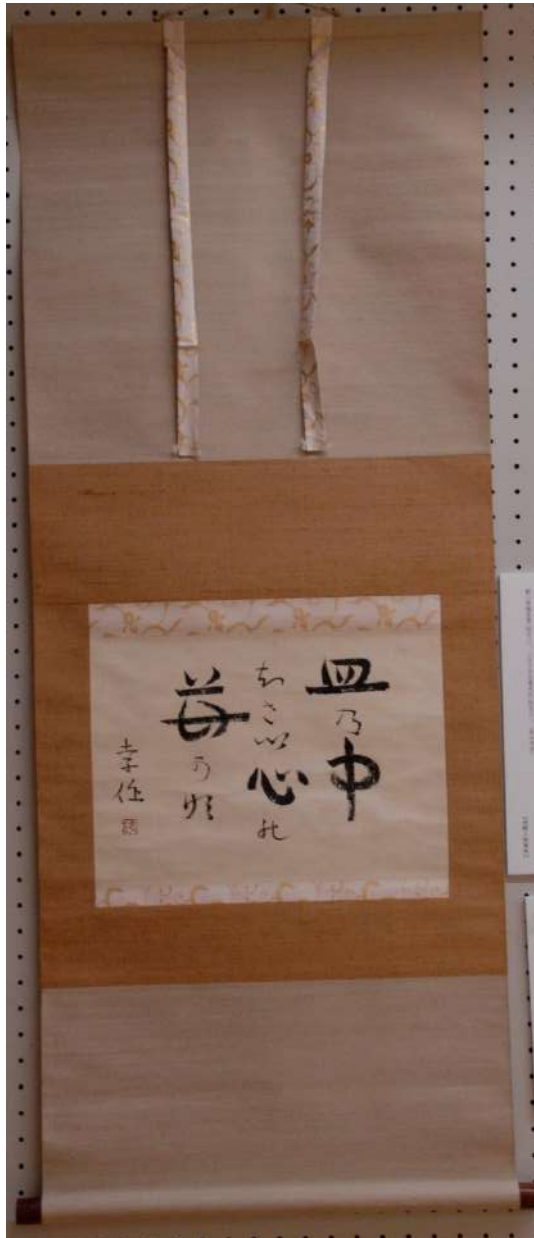
『俳人仲間』で日本文学大賞（昭四九（一九七四））。作品は「瀧井文学」と評され、トツトツとした中にも独特の味わいを持つ。昭和十年（一九三五）の芥川賞創設から五十六年（一九八一）まで選考委員を務めた。俳句を生涯の友とし『瀧井孝作全句集』などがある。高山の観光ポスターに用いる「飛騨高山」の文字など六朝風の書法でも知られる。日本芸術院会員（昭三四）。高山市名誉市民（昭四六）。文化功労者（昭四九）。勲二等瑞宝章（昭五〇）。八王子市名誉市民（昭五〇）。（高山市史）

【飛騨人物事典】

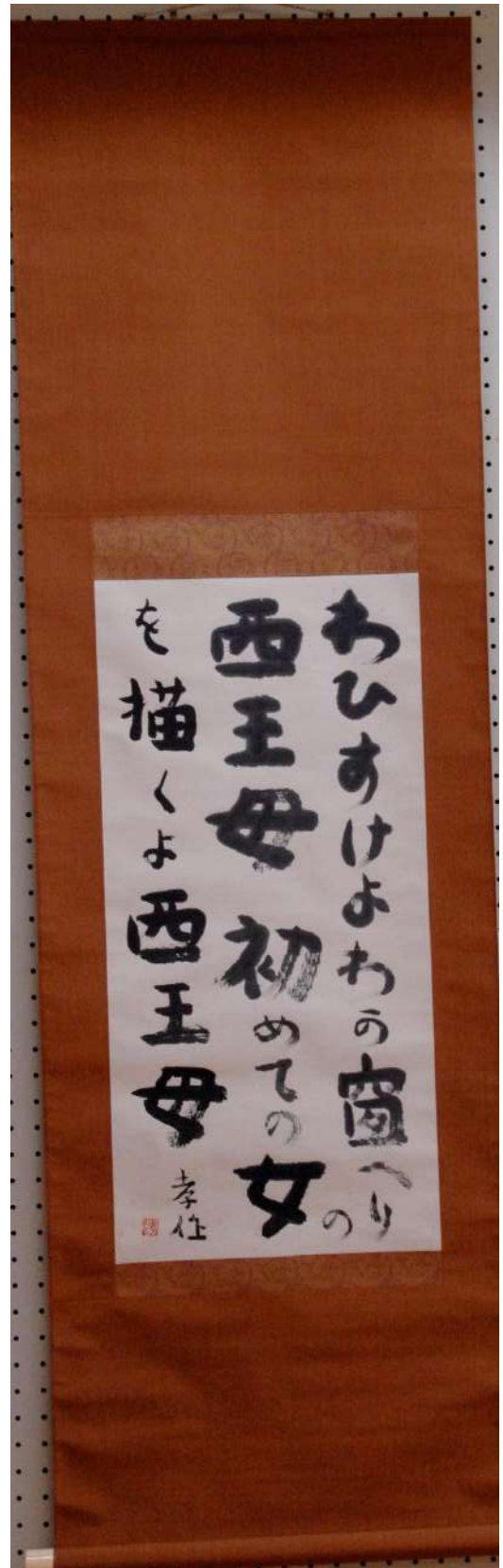


我が家に来るもの桜の葉あびたり
折柴

皿の中ちさい心の苺かな 孝作



わひすけよわか窓へりの西王母 初めての女を描くよ西王母 孝作

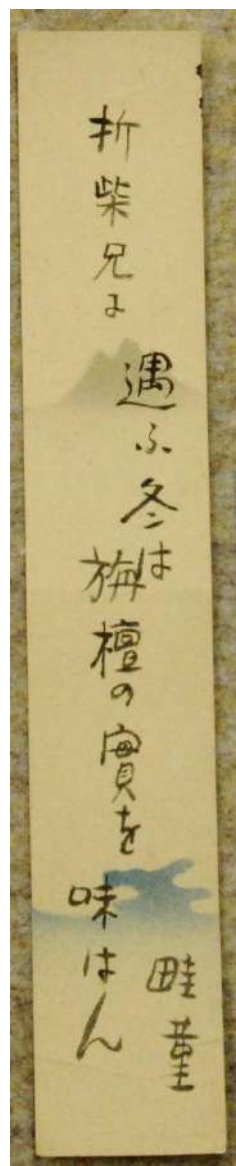


三十二、柚原畦堇〔ゆはら・けいきん〕

明治二十二年（一八八九）十二月二十七日、明治四十四年（一九一）八月十九日

俳人。高山の人。畦三と称する。畠太郎の五男で柚原吉右衛門の養子。花蔭会の俳人で、瀧井孝作に俳句の手ほどきをする。入営後、朝鮮の咸南道の憲兵守備隊に転属し現地で死去。

【飛騨人物事典】



折柴兄に 遇ふ冬は旃檀の實を味はん 畦堇

三十三、岩谷 山梔子「いわや・くちなし」

明治十六年（一八三三）一月三十日、昭和十九年（一九四四）二月四日

俳人、俳画家、編集者。青森県青森町（現青森市）出身。名を健治。複号に木丹亭、黙堂など。

著書に『自選乙字俳論』。十代でカリエスに罹り療養する中で俳句を始め、地元の俳句結社「不来会」に参加、二十歳で高浜虚子の「ホトトギス」に入会、河東碧梧桐が選者であった新聞「日本」にも投句する。碧梧桐の行脚（第一次「三千里」）の際碧梧桐と会い傾倒。：（中略）：明治四十三年（一九一〇）には大谷句仏の俳句結社「懸葵」にも入会。京都に住み、俳誌『懸葵』の編集者となる。以来大須賀乙字の『自選乙字俳論』や浪化の『浪化俳句集』、『本願寺歴代法子句纂』など多くの句集や俳論集を編纂する。

【ウィキペディアより抜粋】



自笑 隻聲に魂をのくや安居僧 梔

布団干す宿の温室に茂る艸 梔

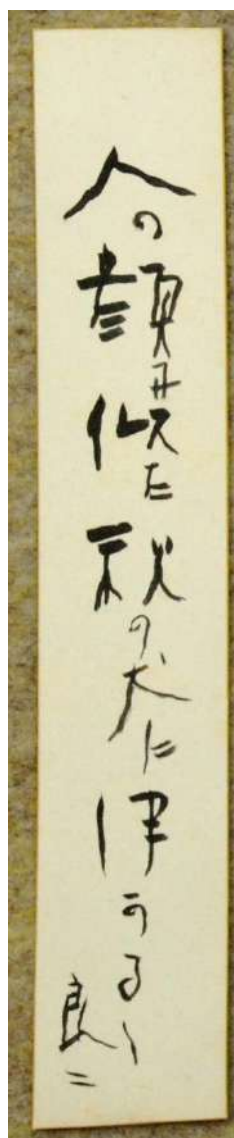


三十四、小鳥良々「おどりりようりよう」

明治二十四年（一八九二）七月十二日、昭和二十一年（一九四六）九月十五日

俳人。高山市本町の人。本名は芳郎。号を芙蓉子。河東碧梧桐に師事し、明治の終わりにから大正にかけて瀧井孝作や福田夕咲の兄・鋤雲らと交流。新傾向俳句結社「素顔吟社」の同人。名句を残したが晩年は句作から遠ざかった。東京で客死。良々の句集『素顔』と遺稿集『素顔』を実弟の小鳥節造が刊行。

【飛騨人物事典】



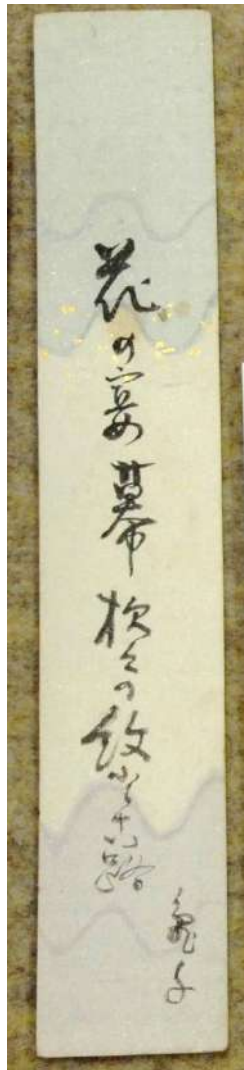
人の顔に似た秋の犬に津かるる 良々

三十五、江黒 房吉(亀千)「えぐろ・ふさきち(きせん)」

明治十六年(一八八三)五月六日、昭和二十六年(一九五二)十二月一日

一位一刀彫師。高山町八軒町生まれで高山市本町二に居住。号は亮聲(初代)、俳号は亀千。明治三十二年(一八九九)に上京し、日本彫刻会の森鳳聲のもとで修業。三十五年(一九〇二)日本美術協会展に入選。四十年(一九〇七)帰郷して木彫に専念。善応寺(高山市)の釈迦三尊、一本杉白山神社(同)神輿彫刻、延命寺(長崎市)薬師十二神将などの作品を残した。俳句をよくし、明治四十三年(一九一〇)花蔭会(のち山ずみ会)に入会。大正八年(一九一九)には、上木可月とともに飛騨俳壇社を結成、さらに水音社を再興。

【飛騨人物事典】



花の宴幕様々の紋ところ 亀千

三十六、江黒亮一(木鳥)「えぐろ・りょういち(もくちょう)」

明治四十二年(一九〇九)一月十七日、没

一位一刀彫師。高山町八軒町生まれ。房吉の長男。号は亮声(二代目)、俳号は木鳥。斐太中学卒。昭和二年(一九二九)から家業の一位一刀彫を父に学んだ。五十四年(一九七九)には泰岳寺(春日井市)の「聖観世音菩薩」完成。五十五年(一九八〇)県下初の伝統工芸士に認定された一人。六十一年(一九八六)飛騨伝統工芸会会長就任。俳句やクラシック音楽を好み、趣味の年賀状交換会「芸社」主宰。山ずみ会同人。錦高会員。著書『きつゝき』。伝統工芸品産業振興協会功労者表彰(昭五二)。高山市文化協会の文化功労顕彰(昭六二)。【飛騨人物事典】



春宵の木屑こまやか女面彫る 木鳥

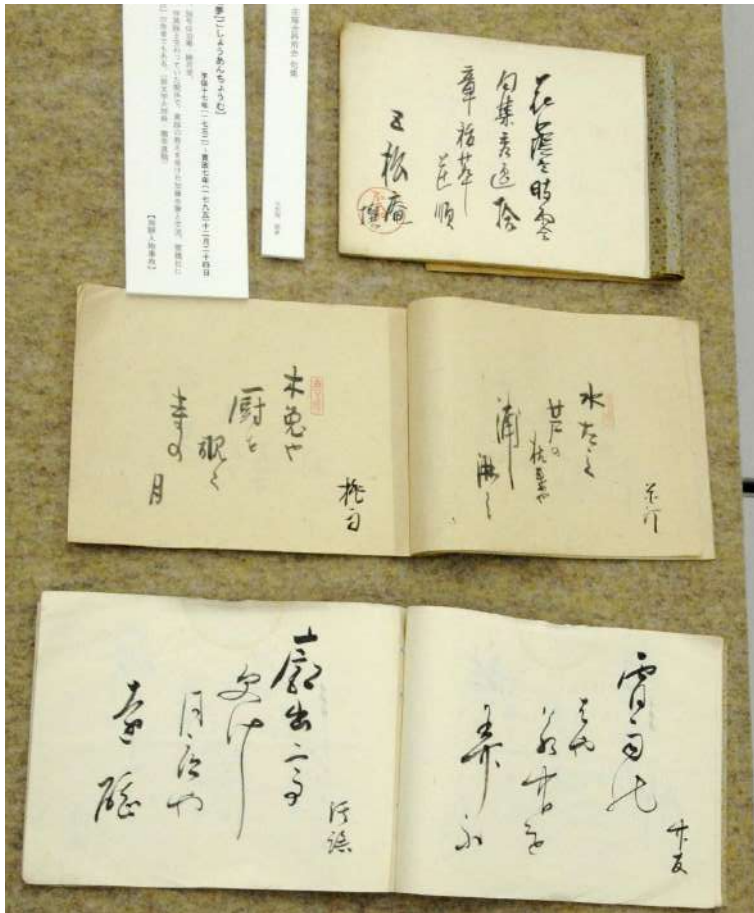
三十七、五升庵 蝶夢「ごしょうあんちようむ」

享保十七年（一七三二）～寛政七年（一七九五）十二月二十四日

俳諧作者。京都生まれ。別号は泊庵・睡花堂。

芭蕉顕彰史上の功績者。伴蒿蹊と交わっていた関係で、蒿蹊の教えを受けた加藤歩簫と交流。雲橋社に伝わる粉本『芭蕉翁絵詞伝』の作者でもある。（俳文学大辞典・蘭亭遺稿）

【飛騨人物事典】



花蔭会時雨会 句集

三十八、水音社「すいおんしゃ」

悪代官としてその名の高い大原彦四郎が、幕命によって明和三年二月飛騨に入り、着任後間もなく清流亭楚諾と号し俳壇水音社を起し、第一世宗匠となった第二世坂田儲史、第三世近藤一左、第四世村瀬也彦、第五世平瀬東有、第六世上木雨台、第七世上木可月

明治時代中絶の形だったが、上木雨台氏によって再興するも大正二年六月、同氏の逝去によりまたも中絶。その間勇桂雪氏が文台を保管、大正六年八月上木可月氏が宗匠となり大正十二年十二月水音社の立機披露。昭和十八年八月同宗匠逝去後江黒亀千氏が文台を保管、昭和三十二年一月亀千氏子息木鳥氏から郷風会が引継を得、その名と文台を継承、現在に至った。【保谷正葉第四句集「人生の旅」より】



水音社関連書籍

(大正10年)水音社前身淳風社の人々(国分寺境内)



戸崎 木公
森部 柴舟
赤保木 武藤 蕪村
二村 九也
江黒 亀千
不老庵可月宗匠
住 其芳
小川 台泉
保谷 正葉

第六章 近世・近代・現代の文芸組織

三十九、俳句結社

近世

〔水音社〕 明和三（一七七六）～明治末
大原 楚諾 坂田 儲史 近藤 一左
村瀬 也彦 平瀬 東有 上木 雨台
上木 可月
〔雲橋社〕 安永二（一七七三）～平成
加藤 歩簫 野口 弄花 加藤 李充
加藤 遶翁 吉島 掃月 日下部 雨外
西本 小夢 伊東 清秋 小森 素峰
加藤 千歩

近代

〔瓢箪会〕 明治一九（一八八六）～明治中期
福田 蕉滴 上木 可中 日下部 雨外
柿下 得園 杉下 守中
〔舊蜀社〕 明治二五（一八九二）～二九（一八九六）
長瀬 壺仙 岡田 禾木 長尾 桃雨
前越 旭州
〔花蔭会〕 明治三二（一八九七）～昭和一〇（一九三五）
永田 不及 柚原 畦董 勇 桂雪
小野 東州 堀花 汀 赤保 木竹友
真木 帆逸 小森 素峰 福田 鋤雲
伊東 清秋 福田 象女 柿下 青緑
古島 夕景
〔深山会〕 明治四〇（一九〇七）年代
柚原 畦董 瀧井 折柴 中谷 芋子
〔笹魚吟社〕 明治四二（一九〇九）～大正五（一九一六）
福田 鋤雲 長瀬 素鳥瓶
〔山すみ会（槐会）〕 昭和三一（一九二八）～
長瀬 素鳥瓶 江黒 亀千 小森 耳風
小峯 大羽 長尾 桃雨 柿下 青緑
長瀬 壺仙 岡田 禾木 小鷹 奇龍子
打保 竹同 溝尻 斐山 江黒 木鳥
真木 帆逸 山中 雪樵
〔素顔〕 大正二二（一九三三）～三三（一九四四）
小鳥 良々 福田 夕咲 福田 鋤雲
代情 イハホ
〔郷風会〕 大正二四（一九二五）～昭和
江黒 亀千 鶴巢 奇松 保谷 正葉
上木 可月 小鳥 春果 長瀬 秀景

現代

「不もと社」昭和二二（一九四六）～平成五（一九九三）休会

山口 利男 谷脇 稔 坂本 清

「グループ俳句会」

葉月会 高山ホトトギス会 東雲俳句会

のりくら句会 好句風会 とまり木句会

土筆会 船山句会 惜春会 他

「木香会」昭和三三（一九四八）～不明

徳永 昌子 小林 正蔵 森田 拾菜

中西 辰江

「くらがね句会」昭和三四（一九五九）～五一（一九七六）

大洞 真砂 坂下 三歩 牛丸 芳日子

「飛騨俳句作家協会」

昭和三三（一九五八）～平成元（一九八九）

山口 麓男 浅井 通生 日下部 宵三

高桑 聡 小鳥 幸男 加藤 裕香

「飛騨俳句会」平成二二（一九九〇）～

小鳥 幸男 伊東 百々栄 住 素蛾

前越 静二 加藤 裕香 桂川 ひでを

坂本山 秀朗

四十、短歌結社

近世

〔田中大秀門〕文政五（一八二三）～明治の頃まで

山崎弘泰 山崎弓雄 富田礼彦

富田道彦 上木清成

〔墨繩会〕文久元（一八六二）～大正の頃まで

山崎弓雄 山崎弓束 富田豊彦

田島南岳 田島春園

〔赤栲会〕明治初め（一八六八）～大正の頃まで

吉島斐之 川上尋春 安保春林

岡村御蔭 船坂真楫 牧野英一

元田脩三

近代

〔山百合詩社〕大正七（一九一八）～昭和初め

福田夕咲 黒内桃月

牛丸抱月 八賀一雄

〔裸形詩社〕昭和五（一九三〇）～昭和十年代

福田夕咲 鎌手白映

谷口桃里 和仁市太郎

現代

〔飛騨短歌会〕昭和二（一九四六）～平成八（一九九六）

福田夕咲 山田白馬 大埜間霽江

鎌手白映 森溪月 江黒美胤

谷口桃里 浅本義一郎

〔道連吟社〕昭和三（一九四七）～二四（一九四九）

福田夕咲 山下笛郎 吉村比呂詩

富田令禾

〔三日会〕昭和三（一九四七）～平成七頃（一九九五）

川上喜美 老田清子 都竹豊治

浅田清子 今寺修三 桜井幸子

〔グループ短歌会〕

松室短歌会 藍染短歌会 若竹短歌会

千草短歌会 柊短歌会 八日町短歌会

あすなろ短歌会 歌人クラブ高山 あかね短歌会

河合歌会 古川八日会 古川かすみ会

国府短歌会 萌木会 木曜会

千種短歌会 一之宮短歌会 丹生川短歌会

他

四十一、詩の結社・文芸誌

「山脈詩派」 昭和八（一九三三）～二四（一九四九）
和仁 市太郎

「飛驒文学」 昭和二（一九四六）～二八（一九五三）
吉村 比呂詩 和仁 市太郎

「詩星」 昭和二（一九四七）～二四（一九四九）
下田 惟直 清水 魚星

「山線詩人」 昭和二四（一九四九）

「森林詩族」 昭和二八（一九五三）～三二（一九五七）
笠 俊介

「ひだ詩話会」 昭和三二（一九五八）～三六（一九六二）
津田 温司

「詩岳」 昭和三五（一九六〇）～三九（一九六四）
西浦 敏郎 大森 葉子

「文苑ひだ」 昭和三五（一九六〇）～三九（一九六四）
「詩苑ひだ」 昭和三五（一九六〇）～三七（一九六二）
田之下 徳重

「飛驒作家」 昭和四二（一九六七）～六二（一九八七）
大森 清男 虎沢 勇治 林 格男
和仁 市太郎

「習作詩帖」 昭和四三（一九六八）～四七（一九七二）
西村 宏一

「足音」 昭和四五（一九七〇）～五五（一九八〇）
桂 覚一 三尾 洋子

「続・蜜」 昭和四六（一九七二）～五二（一九七六）
西村 宏一

「すみなわ」 昭和五二（一九七六）～平成一四（二〇〇二）
西村 宏一 虎沢 勇治 和仁 市太郎

四十二、小説の結社・文芸誌

〔東海文学〕 昭和三四（一九五九）～五七（一九八二）

江夏 美好 霞 好夫

〔飛驒作家〕 昭和四二（一九六七）～六二（一九八七）

霞 好夫 谷口 明 山本 たつ

〔小説飛驒〕 平成元（一九八九）～

山本 たつ

〔懸賞小説〕

鈴鹿 清荘 志田 石高

四十三、その他、評論・随想・他誌

荒垣 英雄

桑谷 正道

小鷹 ふさ

小鳥 幸男

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和四年三月発行

編集 一般社団法人 高山市文化協会

印刷 飛驒印刷株式会社

高山市西之一色町三一六四七―二八

電話 (〇五七七) 三二―一一九一(代)